

オサマ・ビンラディンを追え(下)

—テロ対策におけるシギントの役割

日本大学危機管理学部教授
(元警察庁政策評価審議官)

茂田 忠良

第七 ビンラディン殺害まで

9・11米国同時多発テロ事件の結果、米国はアフガニスタンに侵攻し、アルカイダ壊滅作戦を行った。そのため、アルカイダ幹部の多くがパキスタンに逃げ込み、そのアルカイダ幹部の追跡捕捉が課題となった。

この間、NSAの任務も、単なる情報収集を超えて、世界中のテロ細胞の捕捉と破壊に貢献することを求められるようになった。当時のNSA長官マイケル・ヘイデンは「収集者から狩人へ」を標語として、新任務に積極的に取り組んだ。

1 9・11直後の通信傍受による成果

米国諜報機関は、アルカイダ逃亡者の多くがパキスタンに逃げ込んだと確信し、N

SAは、同国の衛星携帯電話を使った国際通話の全ての傍受を開始したと言われる。これにより得た情報で、次の成果を挙げた。

○ 二〇〇二年三月 パンジャブ州のファイサラバードで、パキスタン当局がアブ・ズベイド(ビンラディンの片腕)他二〇名を逮捕

○ 二〇〇二年七月 カラチ郊外で、ケニア人シェイク・アハメド・サリム(一九九八年のケニア、タンザニア米大使館攻撃に関与)を逮捕

○ 二〇〇二年九月 カラチ郊外で、イエメン人ラムジ・ビナルシブ(9・11の計画立案者の一人)を逮捕

○ 二〇〇三年三月 ラワルピンジで、ハリド・シェイク・ムハマド(9・11の主計画者)、ムハマド・アハメド・アルハ

ウサウイ(アルカイダ幹部)を逮捕。

衛星携帯電話の傍受により、通話内容から情報を取得するだけでなく、端末GPS情報などから発信位置を評定して、逮捕に至る成果を挙げたものと推定できる。

但し、これらの相次ぐ逮捕により、携帯電話使用の危険やNSAによる通信傍受の脅威が知られ、オサマ・ビンラディンは、通信保全の意識を更に高めたようであり、オサマの捕捉には至らなかつた。

2 オサマ捕獲作戦へのシギントの貢献

オサマ・ビンラディンは、米国による追及にも拘わらず長らく潜伏していたが、遂に二〇一一年五月二日米軍特殊部隊により射殺された。オサマは、二〇〇五年前後からパキスタンの首都イスラマバード北東五

○キロのアボタバード市内の隠れ家に潜んでいたが、米国はこれを発見しCIA指揮下の海軍シールズ部隊が急襲したのである。

オサマの発見射殺に至る全貌は未だ明らかになっていないが、オサマ捕獲に至る米国の活動は、CIAが中心となりながらも、ヒューミント（人的諜報）、シギント（信号諜報）、イミント（画像諜報）の諜報各分野の能力を総合して挙げた成果である。この経緯についてマーク・マゼッティ『CIAの秘密戦争』*1を基にその状況を見ると次の通りである。

ア キャンボール作戦開始

二〇〇六年CIAは、オサマ・ビンラディン追跡作戦をキャンボール作戦と名付け、追跡態勢を抜本的に強化した。アフガニスタンとパキスタンに数十人の工作員を増強したが、パキスタン国内への工作員の増強は、二〇〇五年一〇月にカシミール地方で発生した大地震の支援活動を隠れ蓑にして行った。

そして、従来のオサマ追跡作業との違いは、解明の重点をオサマのクীরリエに置いたことである。

そのための情報入手手段として、ヒューミント分野では、パキスタンの部族地域に

協力者を開拓することに力を注いだ。協力者との連絡は、協力者保護のため、直接接触は極力回避して、原則、暗号化したパソコン通信で行った。また運営者と協力者は直接の交信は避け、安全な端末で通信を中継して行っている。イミント分野では、米国においてプレデターやリーパーという無人偵察機が増産されたことよって、アルカイダ容疑施設や訓練キャンプの常時監視が可能となった。シギント活動も、詳細は不明であるが、強化されている。

イ 端緒情報の入手

米国は、アルカイダ工作員の尋問から、通称アブ・アフマド・アル・クエイティという男が、オサマのクীরリエであったとの情報を入手していたが、それ以上の情報を得ることができず、解明は進まなかった。

ところが、二〇〇七年に外国情報機関からクエイティの本名がイブラヒム・サイード・アフマドであるという情報を入手した。そこで、NSAが本情報を基に様々なデータ抽出と分析を行い、本人の携帯電話番号を絞り込み、その通信傍受を開始した。

クエイティの携帯電話に対する通信傍受を継続していたところ、二〇一〇年六月頃ペルシャ湾岸の友人との電話通話で、近況

の質問に対して、クエイティが「昔の仲間と一緒だった」と発言した。このため、クエイティが再びアルカイダで働いており、オサマと接触している可能性が浮上した。

そこで、NSAは、携帯電話の発信位置を探知する技術を使って、携帯電話の所在地をペシャワール近郊と特定した。NSAは各種の技術とデータをを使用して、傍受対象の携帯電話の所在位置を正確に把握する技術を有しているのである*2。

CIAは、NSAから提供されたクエイティの位置情報を基に、パキスタンの協力者を使ってクエイティの発見に取り組み、二〇一〇年八月、協力者がクエイティをペシャワールから追跡して、アボタバードの邸宅に入るのを確認した。この邸宅には電話線もインターネット回線も無く、疑念を呼び起こす邸宅であった。

なお、『CIAの秘密戦争』では、あたかも、パキスタン人協力者がペシャワール市内で偶然クエイティを発見して追跡したかの如く記述しているが、寧ろ、シギントによりペシャワールでのクエイティの所在を特定し、追跡を継続していたところ、アボタバード訪問を捕捉したというのが真相であろう。

ウ 容疑の解明

こうしてCIAは、重要人物が潜伏する可能性のある邸宅を発見し、同邸宅の監視を開始した。先ず、同邸宅の近隣にアジトを設定して同邸宅に対する情報収集の拠点としたが、同アジトからは邸宅を直接視認することはできなかった。また、偵察衛星によって上空から邸宅を撮影して数千枚の画像を取得したが、オサマが潜伏するといふ確たる証拠は得られなかった。

そこで、協力者シヤキテル・アフリディ医師の活用となった。

アフリディ医師は、貧困の生れから一流の医者になっていたが、金に貪欲なことでも知られていた。同医師は、二〇〇九年一月ペシャワルで開催された医療ワークショップで、「セイブ・ザ・チルドレン」パキスタン支部長マイク・ダグラスから声を掛けられ、自宅に招待された。そこで彼は、三十代後半、長身でプロンドのCIA工作員ケイトと会いリクルートされ、CIAに協力していた。彼は、二〇一一年一月に、慈善事業「女性対象のB型肝炎ワクチン接種キャンペーン」の実施を指示される。ワクチン接種を名目に、人の住宅に入り込んで情報を収集すると共に、使用した注射針

を回収してDNA情報を取得する作戦である。開始当初は、カシミール地方、そして北西辺境州で行ったが、次にアボタバードでの実施を指示される。アフリディ医師は四月二一日に容疑邸宅がある住宅地域でワクチン接種を行うが、容疑邸宅だけは内に入れて貰えず、益々不審が強まった。

エ 急襲作戦実施

こうして疑念が深まったため、同年五月二日未明に邸宅急襲作戦が実施された。

作戦は、CIAの指揮下で、現地CIA要員とアフガニスタンの基地から攻撃へりて発進した海軍特殊部隊シールズによる共同作戦として実施された。

邸宅を急襲した特殊部隊は、オサマ・ビンラディンを発見し射殺した。オサマの遺体と共に、ハードドライブ数十個、携帯電話、USBメモリなどを押収して現場を離脱した。作戦所要時間は四〇分であった。その後米国は、押収資料を分析して得られた情報を基に、ドローン攻撃によりアルカイダ工作員多数を殺害していった。その中には、オサマの外部との連絡役を務めたアティヤ・アブド・ラフマンも含まれる。

オ シギントの果たした役割

オサマの捕捉殺害にシギントが果たした

役割について、シギントによるクエイティの解明がアボタバードの隠れ家発見に大きく貢献したことは明らかである。

しかし、この頃にはオサマは電話やインターネットなどの通信手段を使っていないために、その他にシギントがどのような貢献をしたかは明確でない。

なお、ウィリアム・スノーデンが漏洩したNSA内部資料では、本作戦にNSAが重要な役割を果たしたこと、その中にはNSAのTAAグループも関与した程度しか言及はない。TAAグループは、いわばNSAのハッキング実働部隊であるが、容疑邸宅発見後に作戦に加わり、作戦当日にも作戦室で勤務していたという*3。

TAAの一般的任務から判断して、急襲作戦でのTAAの任務は、作戦保全ではないかと推定できる。即ち、パキスタンの国軍、諜報機関、警察の通信システムに侵入して通信を傍受することにより、作戦を阻害する可能性のある行動を早期に探知して現場部隊に警告を発するなどして作戦の成功を支援することと推定できる。参加したTAAメンバーは、任務内容を具体的には述べていないが、「作戦の成功に直接的に貢献でき、生涯忘れられない経験である」

と内部資料で述べている。

終りに

以上、オサマ・ビンラディンとアルカイダ対策を取り上げ、具体的なテロ対策におけるシギントの役割を述べてきた。

テロ対策では、ヒューミンントの他、シギント、イミンントなどインテリジェンス各分野が協力して総合力を発揮することが重要であり、中でもシギントの役割は極めて重要であることを理解して頂けたのではないかと思います。

我が国では、ヒューミンントがテロ対策の王道であると主張する人もいるが、我が国のシギントの現状がテロ対策に貢献していないという事実と、世界標準ではシギントがテロ対策の主要プレーヤーであるという事実を混同してはならない。世界のテロ対策の実態を知らなければ、諸外国との協力も円滑に進めることができないのではないかと考えられる。

なお、昨年一二月一五日、ロシア保安局は「イスラム国」(IS)関係者七人をサンクトペテルブルクの観光名所における自爆テロを計画していたとして拘束した。これはCIAがロシアに提供した情報のお蔭

だとされ、一二月一七日にプーチン露大統領はトランプ米大統領に電話で謝意を伝えている。ここで注意しなければならぬのは、CIAが情報を伝えたからといって情報源がヒューミンントであることを意味しないことである。米国シギント組織NSAが入手した情報であっても、英加豪など米国と特に緊密なシギント協力関係国を除けば、米国諜報コミュニティを代表するのはCIAであるので、外国諜報機関に情報を提供する窓口はCIAとなるのである。事

「付録」テロ対策に活用できるシギント能力

米国は巨大なシギント能力を保持しており、その骨子については本誌一四七号一四八号「サイバー空間の雄―米国・国家安全保障庁」(上)(下)で紹介した。

そのシギント能力が米国のテロ対策で活用されているのは間違いないが、そのシステムが現在テロ対策において具体的にどのように運用されているかについては、ウイリアム・スノーデンが漏洩した内部機密資料でも断片的であり、包括的に言及する資料は見当たらない。

そこで、NSAのシギント能力からテロ対策に活用されていると合理的に推定できるものを

実、本件に関するトランプ大統領のプレスリリースは、情報成果の功績を米国の全諜報コミュニティの成果としている。実務に当たる者はこの点を忘れて頂きたい。

*1 マーク・マゼッティ『CIAの秘密戦争』(早川書房、二〇一六年)

*2 茂田忠良『米国国家安全保障庁の実態研究』(警察政策学会資料第82号、二〇一五年九月)一〇八頁参照。

*3 二〇二二年七月一三日付 SDDtoday

次に紹介する。

NSAは様々なシステム、データベース、技術を保有しているが、特にテロ対策で有用なのが、メタデータ分析とエックスキースコアである。メタデータとは、(通信内容を除く)通信に付随するデータであり、例えば通話当事者の電話番号、携帯端末識別符号、通話日・時刻、携帯端末位置情報などである。また、インターネット通信でも通信内容を除く情報がメタデータである。NSAはメタデータ専用のデータベースを構築して世界中から収集したメタデータの分析に役立てている。また、エックスキー

スコアとは、NSAが世界中で収集したシギント・データの一次記憶装置であり、同時に、同装置から必要なデータを検索抽出するための分析システムである。NSA版「グーグル」とも言われている。これらやその他のシステムの詳細については、右に紹介した本誌連載或いは警察学会資料第82号「米国家安全保障庁の実態研究」(警察政策学会ウェブサイトで公開中)を参照されたい。

テロ対策にシギントが貢献する手法としては、テロリストの捕捉殺害を別とすれば、テロ容疑者の容疑解明とテロ容疑者の発見の二つがある。後者の二つについて記述する。

1 容疑解明 (Target Development)

テロ容疑者として把握された人物の容疑を解明していくために使える手法である。各種の手法があるが、その一部は次の通りである。

ア ネットワーク閲覧履歴やSNSによる人物分析

メタデータ分析によって、ウェブサイトの閲覧履歴やSNSの交友履歴を分析することにより、当該人物の交友関係、団体活動履歴、何時何処で誰と会ったかなどを把握することができる。これに、FBIなどのセキュリティ・サービス機関が収集できる銀行口座情報、保険情報、旅客名簿、選挙人名簿、財産情報、税務情報などを加えれば、これによって当該人物の全体像を把握することができる。

イ 携帯電話やスマートフォンを使用した行動監視

メタデータのデータベースの一つに位置情報を集めたデータベースFASCI Aがある。通信事業者は、携帯電話接続のため或いはスマートフォンに対するネットサービスのために常時位置情報を取得しているが、この位置情報を各種の方法で収集し構築したデータベースである。これを使うことにより、容疑人物の移動状況を人が尾行することなしに監視することができる。

ウ スマートフォン攻略による行動監視

更に、容疑が深まった人物については、同人のスマートフォンをハッキングすることにより、記録内容を取得したり、或いは、スマートフォンのカメラやマイクを遠隔で捜査して監視器材として使用することができる。

もちろん、容疑人物が通信保全を徹底すれば容疑解明は困難であるが、オサマ・ビンラディン捕捉作戦でも、先に指摘したようにクエイティの不注意な通話からオサマ発見に至る重要情報取得されている。テロ容疑者或いは支援者の通信保全も完璧であるわけではない。シギント能力の活用は、テロ容疑者の容疑解明に大きく貢献し得るのである。

2 容疑者発見 (Target Discovery) ～既知の関係者から

既知のテロ容疑者の交友関係から未把握のテ

ロ容疑者を発見することができる。セキュリティ・サービスなどテロ対策機関は、嘗ては尾行張込が主要な手段であったと見られるが、現在は大きく進歩しているのである。

ア 接触連鎖分析

メタデータ分析の手法に、接触連鎖分析(contact chaining)という手法がある。これは、誰が誰と連絡を取り合っているかを、収集したメタデータから自動的に図示する手法で、これにより、既知の容疑者を取り巻く関係者の相互連絡関係が自動的に検出できる。9・11テロの関係者もこの接触連鎖分析をしていれば、早期に発見できていた可能性が指摘されている。

イ 同伴者分析

位置情報データベースFASCI Aを使用した分析方法のひとつで、携帯電話やスマートフォンの位置情報を分析することにより、特定のテロ容疑者と同様な行動を採る者や接触したと見られる者を検出することができる。

ウ 通信コンテンツからの容疑者発見

既知の容疑者のメールや通話を通信傍受により監視することにより、その通信相手や通信内容から新たな容疑者を発見することができる。

3 容疑者発見 (Target Discovery) ～行動分析から

現在は、ローンウルフ型のテロが増加している。これは、特定のテロ集団とは連絡を取らず

に、自ら過激化してテロに至る者である。この発見は極めて難しく既存のセキュリティ・サービス機関に大きな挑戦を突き付けている。この分野においても、次のような手法で米国シギントは貢献している。

ア エックススキースコア使用による行動分析
NSAのグーグルとも呼ばれるシステムは、極めて利用価値が高いようである。不特定者がインターネット空間において行う様々な行動を捕捉し分析することにより、テロ容疑者の発見に貢献できる。例えば、

○ 特定の過激なウェブサイトを閲覧検索する者を検出抽出する。
○ 特定の単語によってウェブ検索をする者を検出抽出する。

○ グーグルマップの検索状況から、テロ準備の為の調査活動を行っている可能性のある者を検出抽出する。

○ インターネット空間に流通するテロを使喚する文書の作成者と作成場所を特定する。

○ 特定の地域（例えばアフガニスタンの特定地域）と暗号通信をする者、特定の地域（例えばシリアの「イスラム国」支配地域）から特定言語（例えば日本語）でメール通信をしている者を検出抽出する。

インターネット空間でこのような行動をする者は多数に上り、一つの行動分析によってテロ容疑者を発見できる訳ではないが、NSAは試

行錯誤しながらアルゴリズムを開発向上させて、テロ容疑者の可能性がより高い者を検出抽出していると考えられる。

スノーデンの漏洩資料によれば、ドイツのセキュリティ・サービス機関であるドイツ連邦憲法擁護庁BfVは、それが取得した通信データの分析のために、米国からエックススキースコアのソフトウェアの提供を受けている。その有用性を示したのと言えよう。

イ カナダの「レヴィテーション」計画（カナダCSE）

過激派は、無料ファイル共有サイトを利用して、過激思想の宣伝を行い、更に、爆弾製造教本などテロのマニュアルを拡散させている。そこで、カナダのシギント機関CSEは、無料ファイル共有サイトの監視によって、テロ容疑者を発見しようとしている。

世界の一〇二の無料ファイル共有サイトの特定部分二二〇〇カ所を監視し、過激ビデオや過激文書のダウンロードを分析して、月に三五〇件程度の「興味深い」者を発見しIPアドレスを取得している。これらIPアドレスについて、更にその使用者についてのデータ収集分析を行い、テロ容疑者と判定した場合には、更にテロ担当の専門部署に資料を提供して調査を進めることとなる。

ウ 「通信保全活動」をする者を発見
テロ容疑者が監視を逃れるために通信保全を

行っている可能性が高いことを逆手にとり、位置情報データベースFASCI Aを使用して通信保全活動をする者を発見することによって、テロ容疑者を発見しようとするものである。

これによって、通話時だけ電源を入れる者、幾つもの携帯電話を使い分ける者、会合地点で電源を切る者、使い捨て携帯電話の使用などを捕捉し、位置情報の分析と合わせてテロ容疑者を発見捕捉している。

4 まとめ

このようにテロ容疑者の容疑を解明し、或いはテロ容疑者を発見する手法は多々ある。これらを活用して、テロ容疑を解明し、或いはテロ容疑者を発見した事例は多いと推定できる。但し、シギントでテロ対策に成果が上がったとしても、シギント・システムの秘密保全のために、それらが公表されることはない。そのために、テロ対策におけるシギントの役割は広く知られることはない。

しかし、前回の冒頭にも述べたように、元米国家テロ対策センター長マイケル・ライトナーは「シギント機関である」NSAが傑出した選手或いは中心プレーヤーでなかったテロ調査・捜査というのは思い付かない」とまで語っているのである。

このような手法を持たない我が国でテロ対策に当たる方々の苦勞を偲び、御健闘を期待するばかりである。